

熊本市立田山におけるサトウラギンヒョウモン (鱗翅目：タテハチョウ科) の初採集記録

渋田 直樹¹⁾, 寺崎 昭典²⁾, 杉浦 直人¹⁾

¹⁾熊本大学理学部, ²⁾合同会社フィールドリサーチ

First Record of the high brown fritillary *Argynnis (Fabriciana) pallescens pallescens* (Lepidoptera: Nymphalidae) from Tatsuta-yama, Kumamoto City, Japan

Naoki Shibuta¹⁾, Akinori Terasaki²⁾, Naoto Sugiura¹⁾

¹⁾Faculty of Science, Kumamoto University, ²⁾Field Research LLC

周囲が開発され孤立化しているにもかかわらず、熊本市中央区と北区の境界付近に位置する立田山（標高152 m）には今も比較的良好な自然環境が残されている。そのためあって、熊本県によって「森林ミュージアム立田山憩の森」として整備され、散策やレクリエーションの場としてひろく利用されている。この立田山において井上・後藤（2017）はチョウ類を対象としたトランセクト調査を実施するとともに、森林総合研究所に保管されていた標本や文献（森本ほか 1977）も活用し、1970年代～2014年の立田山のチョウ相とその変遷を明らかにした。それによると、立田山からはアゲハチョウ科9種、シロチョウ科7種、シジミチョウ科17種、タテハチョウ科23種、セセリチョウ科10種の計66種の生息記録があり、そのうちの1970年代に記録があるヤマトスジグロシロチョウ *Pieris nesis*, タイワンツバメシジミ *Everes lacturnus*, コムラサキ *Apatura metis*, ジャノメチョウ *Minois dryas*, ミヤマセセリ *Erynnis montanus*, ホソバセセリ *Isoteinon*

lamprospilus の計6種については、2000年代以降は確認されておらず、絶滅またはほぼ絶滅状態であるという。

近年、日本産ウラギンヒョウモンをDNA、翅形、発香鱗、分布域等の違いをもとにサトウラギンヒョウモン *Argynnis (Fabriciana) pallescens pallescens*, ヤマウラギンヒョウモン *Argynnis (Fabriciana) nagiae*, ヒメウラギンヒョウモン *Argynnis (Fabriciana) kunikanei* の3種に細分する分類学的見解が公表された（新川・岩崎 2019）。それによると、九州にはそのうちの前2種が分布しているという。著者のひとり渋田は2021年3月下旬～11月中旬に立田山においてチョウ類を対象とするルートを固定したトランセクト調査を実施した。その際、井上・後藤（2017）には記録のないサトウラギンヒョウモンのメス1頭（図1）を採集したので、ここに報告しておきたい。白水（2006）によると、ウラギンヒョウモン（広義）*Fabriciana adippe* は北海道・本州・四国・九州に分布し、各地に普通であるが、暖地の平地～低山地域では他のヒョ



図1 2021年9月28日に立田山で採集されたサトウラギンヒョウモンのメス。
(左) 翅表. (右) 翅裏.

ウモン類に比べればむしろ少ないという。実際、熊本県においても本種は阿蘇など山地の草原に行けば珍しくないが、平地ではめったにみられず、著者らの知り得た限りでは立田山における過去の採集例がなかった（井上・後藤 2017；寺崎 未発表データ）。

採集時の状況は次のとおりである。2021年9月28日の正午頃、立田山憩の森管理センター付近の三方を木立に囲まれた芝地の地表面に止まっているウラギンヒョウモン1頭を発見し、ヒトの気配を感じて飛び立ったところを採集した。その前翅、後翅に大きな破損箇所はなかったが、翅面の擦れが顕著だったことから日齢の経過した個体（夏眠明けの活動個体）と思われた。後日、この個体は岩崎郁雄氏によってサトウラギンヒョウモンと同定された。熊本県にウラギンヒョウモン（広義）が生息していることは周知の事実だが、本県において専門家によってサトウラギンヒョウモンとして信頼性の高い同定がなされたのは今回の採集個体が初めてと思われる。

本種が立田山に生息（定着）しているか否かは判断しかねるが、採集日以降のトランセクト調査で追加個体が得られなかったこと、前記したようにおそらく過去の採集記録もないことを考えあわせると、定着していない可能性のほうが高いように思われる。一部の研究者（手代木 1990；伊藤 2017；草刈 2021）は標高の低い場所で羽化したウラギンヒョウモンなどの大型ヒョウモン類が夏眠せず、標高の高い場所あるいは低山帯の森林地帯に移動して過ごし、9月頃に一部が平地に再移動すると考

えているが、この推察にもとづいて考えれば、今回の採集個体は低山帯からの季節的な移動・分散によって平地（立田山）に辿り着いたのかもしれない。

採集個体を同定してくださった岩崎郁雄氏、岩崎氏に同定を依頼してくださった溝部忠志氏に深謝の意を表する。

引用文献

- 井上大成・後藤秀章. 2017. 立田山（熊本市）のチョウ類相. 蝶と蛾 68: 92-103.
- 伊藤隆夫. 2017. 大型ヒョウモン類の「夏眠」の非存在性：推定される成虫の季節的移動. 昆虫と自然 52(10): 28-31.
- 草刈広一. 2021. 飯豊山地におけるヒョウモンチョウ類の生態的知見. 越佐昆虫同好会報 124: 1-9.
- 森本桂・倉永善太郎・岩崎厚・吉田成章. 1977. 立田山の昆虫類. 三十年の歩み（農林省林業試験場九州支場編）pp. 159-200. 農林省林業試験場九州支場，熊本. 242 pp.
- 新川勉・岩崎郁雄. 2019. 日本のウラギンヒョウモン. ヴィッセン出版，宮崎，128 pp.
- 白水隆. 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京，336 pp.
- 手代木求. 1990. 日本産蝶類幼虫・成虫図鑑Ⅰ タテハチョウ科. 東海大学出版会，東京，109 pp.

受付日：2022年1月25日 受理日：2022年4月17日

連絡先：杉浦直人

〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

熊本大学理学部

電子メール sugiura@kumamoto-u.ac.jp